地域連携・フロンティアセンター

2022（令和 4）年度実績報告

日本赤十字看護大学 Frontier Center
地域連携・フロンティアセンター

目　次

Ⅰ．目的と運営 1
A．目的 1
B．組織運営 2

Ⅱ．事業 3

A．地域連携部門 3
1．公開講座 3
2．ホームカミング・デー 4
3．日赤出張暮らしの保健室 5
4．誰でも学べる地域セミナー 6

B．災害看護部門 7
1．武蔵野地域防災活動 7
2．日赤広尾防災プロジェクト 8

C．継続教育部門 9
1．セミナー部会 9
2．実習指導者研修会 10

D．実践研究部門 17
1．赤十字リサーチ・フェスタ 17

E．さいたま地域連携・フロンティア運営委員会 19
1．公開講座 19
2．大学コンソーシアムさいたま 20
3．UR 都市機構との連携 21
4．埼玉県内における２つの赤十字病院の看護師への研究指導 22
5．さいたま市保健所への COVID-19 対策支援活動 23
6．学内での活動の推進 24

Ⅰ．目的と運営

A. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、日本赤十字看護大学が、これまでの知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護を追究し、開かれた大学をめざして 2005（平成 17）年 8 月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターを前身としている。

斬新な発想で創造的な活動を行う必要があるという認識のもとにスタートし、10 年目を迎えた平成 27 年度には地域連携の推進をその活動の中心的役割を担うことを目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新たに出発した。

2017（平成 29）年度 4 月に地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され、地域連携・フロンティアセンター運営委員会という組織とされた。同時に本学の地域社会連携ポリシーは地域社会連携、産官学連携が強調され、組織、機能に関する規定も下記のとおりに改正された。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

（1）多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
（2）看護実践の研究活動を通し、その知見を学内外に発信する。
（3）看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
（4）開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

B. 組織運営（図1）

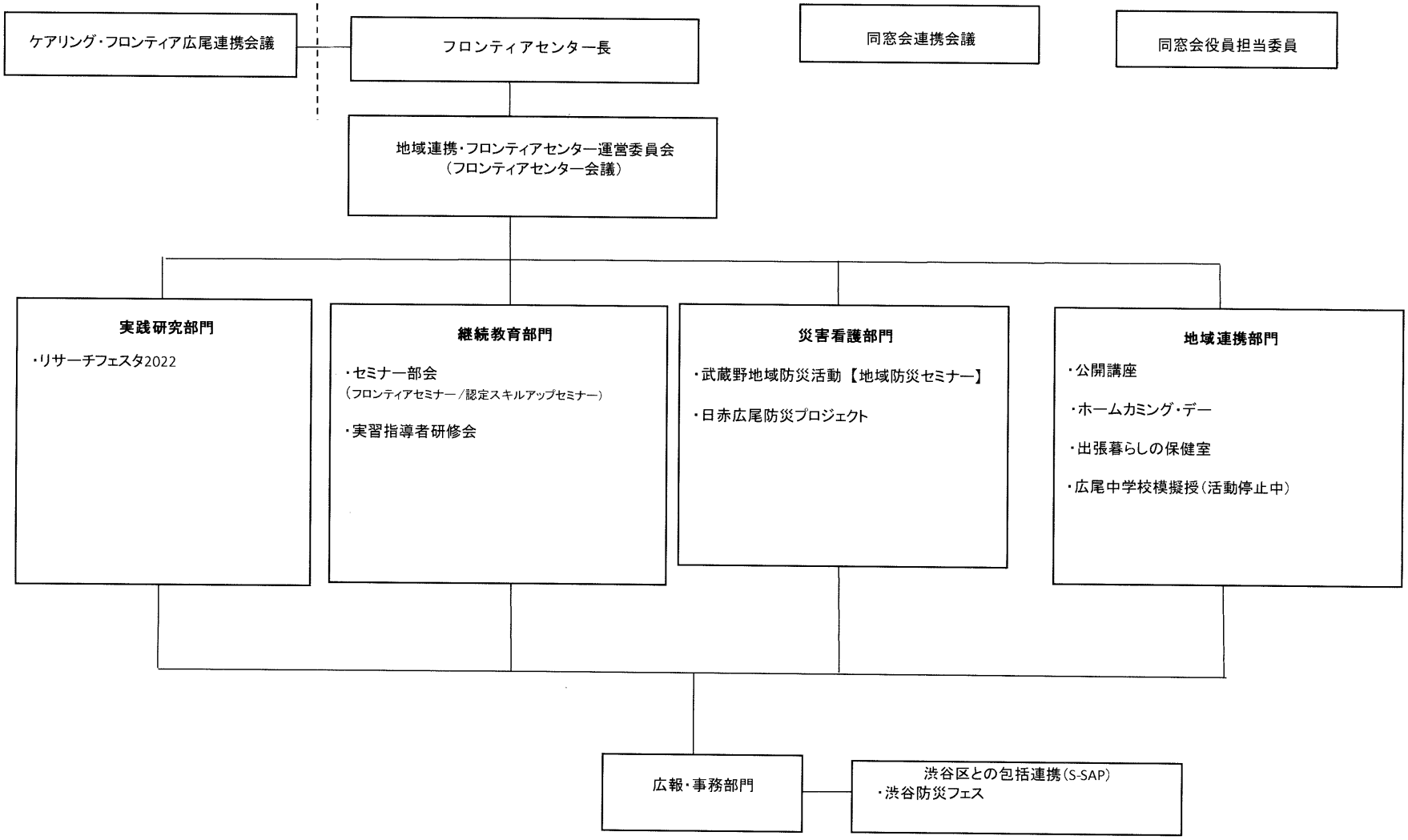
フロンティアセンターの活動は、①地域連携部門として、公開講座、ホームカミング・デー、都営住宅での出張暮らしの保健室、広尾中学校の模擬授業、②災害看護部門として、武蔵野地域防災セミナー、なみえプロジェクト、広尾地区防災連携活動、③継続教育部門として、フロンテイアセミナー部会、認定スキルアップセミナー部会、実習指導者研修部会、④実践研究部門として、実践と教育との連携で実施するリサーチ・フェスタの活動がある。

フロンティアセンターの運営は、地域連携・フロンティアセンター運営委員会で検討する。令和３年度、運営委員会は３回開催し、①年間計画及び会計・予算、②各事業の運営等について検討、共有した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。各事業実施にあたっては、学内の教職員、災害看護ボランティアの看護学部学生や大学院学生をはじめ、これまでの事業に参加いただいている方や本学大学院修了生など幅広い力を得て運営した。

平成25年度に開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院等と協働の独立した組織として各プロジェクトの進捗を共有している。

新型コロナウィルス感染症の拡大に伴い、事業は延期や中止としたが、今後も地域社会との連携の一層の強化をめざし、新たな組織体制と活動を推進していく予定である。

2022（令和4）年度　日本赤十字看護大学　地域連携・フロンティアセンター組織図



Ⅱ. 事業

A. 地域連携部門

1. 公開講座

a. 趣旨

公開講座は、社会における一般公衆の保健福祉看護に関する知識の向上を図るため、一般住民を対象として、本学における特色のある研究や教育の成果などを広く社会に提供する住民参加型の講演会である。

b. 活動内容

2022（令和4）年度は、「WITH／AFTER コロナ時代の生活」を大テーマに据えて、2回の講演会を開催した。このテーマにあわせ、2021（令和3）年度はオンライン開催であった本講座だが、1回目の講演会は学内で十分な感染予防対策を講じて対面方式の開催とし、2回目については講演内容から参加者はオンライン開催のニーズが高いことが予測されたため、オンライン開催とした。

1回目はテーマ「COVID-19における保健所保健師活動の実際と健康危機におけるこころとからだの健康管理」（講師：本学准教授吉川悦子氏）は参加者数19名、2回目は「コロナ禍で育つ子どもたち」（講師：本学助教田代祐子氏）14名であった。参加者からは、コロナ禍の3年を振り返る機会となった、久しぶりの講座が（対面で）受けられて懐かしかったなどの意見がよせられ、概ね好評であった。

c. 来年度の課題と展望

2022（令和4）年度の公開講座大テーマ「WITH／AFTER コロナ時代の生活」は2023（令和5）年度以降の公開講座を企画運営していく上での大テーマでもある。コロナ禍で人々のメンタルヘルスには様々な問題が生じているほか、日本のみならず世界各国で勃発している自然災害や人災とも言える様々な紛争、深刻な地球温暖化問題などに注目し、2023（令和5）年度は大テーマを「今、私たちはこの地球で どのように暮らしていくか」として、地球温暖化問題、災害看護、メンタルヘルス問題のスペシャリストによる3回の講座を計画している。

2023（令和5）年度の公開講座は地域住民のニーズも踏まえて、感染症の感染拡大の予防策を講じつつ、全てを従来通りの対面式での開催とする。

従来の公開講座参加者が高齢者層に特化していることから、今後、様々な年齢層の地域住民が関心をもち参加できる公開講座を目指していく必要がある。2023（令和5）年度は、近隣の中学に積極的な広報活動を行い、中学生及び家族、学校教職員の参加促進を図ることを計画している。

2. ホームカミング・デー

a. 趣旨

本学卒業生・修了生を対象として交流の場や学びの機会を提供することを目的として年1回開催する。

b. 活動内容

開催日時：2023（令和5）年3月11日（土）14時～17時
開催場所：202教室、Zoomウェビナー（ハイブリッド）
参加者：対面16（2）名、Zoom最大20（10）名、（ ）は教職員数

プログラム

第1部：津野青嵐さん「他者と共に作られていく装い　～対話の中で自己感を修復し、取り戻す～」

津野さんは、本学卒業後精神科病院にて看護師として勤務しながらファッションスクールで学び、アーティスト、ファッションデザイナーとしても活動をしている。現在は、東京工業大学の大学院生として、ファッションやアートは自己（自己感）の現れであり、自分を取り戻すあるいは修復する一つの表現ツールであると考え、研究している。今回は、ファッションやアートをケアに取り入れた関わりについてお話いただいた。今後は自分の制作と並行して精神福祉や医療の現場で看護とアートを結びつける新たな試みや今後のビジョンについてお話しいただいた。

第2部：及川咲さん「チーム医療の中での高度実践看護師の役割」

及川さんは現在老人看護CNSとして日本赤十字社医療センターで認知症ケアチームの一員として活動されている。実際の活動の紹介とともに、医療チームの中でCNSがどのような役割を期待されているのか、これからのCNSの役割について、多様な看護を創造し「看護の色をよりカラフルにする」という、今後のビジョンについてお話しいただいた。

フロアを交えた質疑応答では活発な質問・発言がなされ、看護の多様性、看護の未来について考える機会となった。

参加者へのアンケート結果：回答者10名

「非常に良かった」と回答するなど、プログラム内容に対する評価は非常に高かった。

c. 今後の課題と展望

参加しやすさという点から考えると、ハイブリッドでの開催は、遠方にお住まいの方の参加や勤務状況により対面参加できない方の参加、参加方法が選択できるという利点もあり参加数が確保できたと考える。会終了後の教室が同窓生の交流の場となっていたことを考えると、対面での開催をメインとし、多くの卒業生や修了生の交流の場が提供できる方法を検討する。

広報について、同窓会誌と同窓生への案内メールを見て参加したという回答者はいずれもおらず、今後どのように同窓生に情報をアナウンスしていくのか検討する必要がある。

3. 日赤出張暮らしの保健室

a. 趣旨

災害看護部門委員会の日赤広尾防災プロジェクト事業活動の一つとして、都営渋谷東2丁目アパートにおいて防災関係の出張講座を行った際のアンケート結果から、参加者は高齢者が多く、健康相談に関するニーズが高かったことから、地域連携部門委員会試しのプログラムとして、同住宅の住民を対象に出張保健室を開設した。

b. 活動内容

2022（令和 4）年度については、本部会としては、都営住宅の自治会長への挨拶と、今後の活動に関わる許可を得たものの、コロナ禍で地域包括支援センターによる活動や本学からの調査に関わる依頼が重なっていたことから、本部会主体の実施は控えた。
都営住宅における本学の関わりとしては、看護管理領域の大学院生による健康教育（10 月に実施）と、地域看護学領域による災害時に関わるニーズ調査（2 月 27 日 10 名に実施）があり、実施内容や調査結果を本部会でも共有してもらっている。

c. 来年度の課題と展望

対象が同じ都営住宅の住民（自治会長、民生委員、その他の住民）であることから、地域包括支援センターとの協働、本学大学院生の活動との協働を前提に、ニーズに応じた活動を改めて企画していく必要がある。

4. 誰でも学べる地域セミナー

a. 趣旨

公開講座や委員会によるセミナー等とは別に、地域貢献の一環として、企画課が主催するセミナーで、受講者のニーズに即した題材を選び、タイムリーに企画・開催する。

b. 活動内容

◆第1回　2023（令和5）年1月21日（土）14:30～16:00

テーマ：「困ったときの社会保障・社会福祉制度の相談・利用」
～戦後の福祉国家の歩みと現状を踏まえて～
講　師：常数英昭氏（東京都立府中看護専門学校 及び
東京都立荏原看護専門学校 非常勤講師（社会保・社会福祉科目担当））
参加人数：25名

◆第2回　2023（令和5）年3月6日（月）15:00～16:30

テーマ：「名画の世界へようこそ」～対話でつくるアートのひととき～
講　師：横山由美氏（アート・ファシリテーター）
参加人数：24名

c. 来年度の課題と展望

今年度はウィズコロナの観点から、後期に2回、対面で開催し、予想以上の好評価の結果を得た。両セミナーとも、2回目開催のリクエストが多く、今後はシリーズで開催することも視野に入れたい。
とは言え、新たな題材も開拓して、幅広い世代の受講者を獲得し、本学の地域貢献と広報活動、更には、寄付金獲得へと繋げていくため、来年度は今年度と同じく、2回程度の開催を計画したい。

B. 災害看護部門

1. 武蔵野地域防災活動（武蔵野地域防災セミナーおよび武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練））

a. 趣旨

1) 武蔵野地域防災セミナー

武蔵野市防災課、武蔵野市民防災協会、武蔵野市民防災活動グループ（通称COSMOS）、および本学が共同してセミナーを企画運営し、武蔵野市民を主な対象として、市民防災力の向上を目指している。

2) 武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）

武蔵野市の医師会、歯科医師会、薬剤師会、助産師会等と3つの病院、防災課および本学が参加し、緊急医療救護所のレイアウト案などの作成および検証、緊急医療救護所活動マニュアルの検証、医療連携訓練全体の評価、感染対策を考慮したレイアウト・医療救護活動などの検討を目的に活動している。

b. 活動内容

1) 武蔵野地域防災セミナー

テーマを「知っていますか？首都直下地震の新しい想定」として、それぞれ 2 時間のセミナーを 3 回実施した。概要は以下である。

(1)第 1 回：2023（令和 5）年 1 月 4 日（土）「どうする首都直下型地震～武蔵野市の備えとあなたの備え～」として、武蔵野防災課・防災協会が主で企画し、首都直下型地震改定内容、熊本地震体験談等の講義と討論を行った。方法はハイブリッド。参加者 35 名（対面 14 名、オンライン 21 名）。本学からは大学院生 4 名、教員 1 名。

(2)第 2 回：2023（令和 5）年 2 月 4 日（土）「地震だ！　自分と家族を守る　あなたの避難と避難生活」として、本学災害看護領域大学院生が主で企画し、震災時の避難について演習を行った。対面で実施し、参加者 24 人。本学からは大学院生 4 名、教員 1 名。

(3)第 3 回：2023（令和 5）年 3 月 4 日（土）「災害発生の判断、あなたならどうする？」として COSMOS が主で企画し、自作のクロスロードゲーム（演習）を行った。対面で実施し、参加者 19 人。本学からは学生サークル SKV（災害救護ボランティアサークル）3 名、大学院生 4 名、教員 1 名。

2) 武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）

2022（令和 4）年 10 月 23 日（日）9 時～12 時、緊急医療救護所を吉祥寺南町コミュニティセンターに設置し、災害拠点連携病院である吉祥寺南病院で、医療救護本部との通信訓練及び寸劇方式によるトリアージおよび、傷病者受け入れ訓練を実施した。本学からは SKV22 名、教員 2 名が参加した。

c. 来年度の課題と展望

1) 武蔵野地域防災セミナー

5月から会議を始める。対面で実施し、6回のセミナーを実施する予定。演習を多くし、より住民参加型にし、対象を絞った出前講義も検討する。

2) 武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）

次年度もSKVと共に参加し、医療救護について検討する機会とする。

2. 日赤広尾防災プロジェクト　HiCaDip(Hiroo Campus Disaster Prevention) Project

a. 趣旨

広尾地区に存在する日本赤十字看護大学、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社幹部看護師研究センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社医療センター付属乳児院の 6 組織、及び日本赤十字社、渋谷区医師会、渋谷区危機管理対策部の計 9 組織に所属するメンバーで構成されたプロジェクトである。広尾地区の赤十字関連組織および渋谷区地域の組織間ネットーワークを生かした活動を実施している。

b. 活動内容

広尾地区防災プロジェクト会議を4回（5月12日、7月21日、10月13日、2月16日）開催し、広尾地域6施設の状況および今後の計画や実施状況を確認した。

広尾地区住民との連携防災活動として、子ども食堂での出張防災講座を5回開催した。8月8日、9月12日、9月20日はローリングストックを実施し、11月14日、12月20日は手洗いに関する講座を実施した。

活動内容をまとめ、日本赤十字社第３回地域包括ケアサロン（会期：2023年2月13日、14日）での「支部、本社各部署、外部協力団体活動報告の掲示」としてポスター発表を行った。

c. 来年度の課題と展望

2023（令和5）年度は、オンラインと対面の双方の良い点を生かしながら、下記の活動を年間4～5回程度実施していくことを確認した。

1) 地域防災活動への参加

コロナウイルス感染症2019以前の対面での防災訓練も再開が見込まれている。①防災キャラバンへの出展（11月18日、広尾中学校）；②子ども食堂における防災出張講座（年3回程度）を実施する。

2) 6施設の連携強化

「広尾地区6施設における災害時の支援・受援体制について」の情報が2017年度以降更新されていないため、①情報更新による最新の強みと弱みの抽出；②各施設で更新した情報の共有；③実際の連携に向けたシミュレーションを実施する。これらの3つの活動によって、災害時の支援、受援にあたって顔の見える関係を強化する。連携強化のためには各施設のBCPの確認、日本赤十字社救護課の参加も依頼し、より実践的な組織体へとブラッシュアップする。

C. 継続教育部門

1. セミナー部会

a. 趣旨

本部会は、①本学の教育的機能を活用した人材育成、病院との協働、臨床実践能力の向上を目指し、タイムリーな発信を行う場と位置づけられている「フロンティアセミナー」、②本学の認定看護師教育課程修了生のフォローアップを主目的としている「認定看護師のためのスキルアップセミナー（以下、スキルアップセミナー）」の企画、運営を担う。

b. 活動内容

今年度も「認定看護師のためのスキルアップセミナー」と「フロンティアセミナー」の合同開催（オンライン）とした。昨年度テーマの「日々の看護実践を語り合う」に続き、今年度は次のステップとして「看護実践をカタチにする」というテーマのもと、看護実践を共有する意味と方法について学ぶ機会となるよう企画した。

日時：2022（令和4）年11月5日（土）10:30～16:45
開催方法：Zoomによるライブ配信
セミナーテーマ：「看護実践をカタチにする―共有する意味と方法」
プログラム：
基調講演；「伝えよう、あなたの看護実践」
　　講師　江本リナ（日本赤十字看護大学教授・小児看護学）

研究セミナー；「看護研究を始めるための統計学と疫学」
　　講師　川﨑洋平（日本赤十字看護大学准教授・統計学）

シンポジウム；「私たちの看護実践をカタチにして発表する」
シンポジスト
　川原妙子（東京女子医科大学付属八千代医療センター　慢性呼吸器疾患看護認定看護師）
　菅野さやか（北里大学病院　新生児集中ケア認定看護師）
　若林留美（東京女子医科大学病院　慢性心不全看護認定看護師）
司　会　松本麻里（公立昭和病院　糖尿病看護認定看護師）

参加者は、臨床の看護職、大学院生、教員の約336名、フロンティアセミナー（基調講演と研究セミナーのみ）の参加は9名、全プログラム参加は327名であった。

基調講演はチャットを活用した参加型で行われ、自身の臨床実践を伝えることの意味やその方法について考え共有する機会が得られていた。研究セミナーでは日々の看護実践の中での疑問を看護研究として明らかにし伝えていくための具体的な統計学的方法について講演された。シンポジウムにおいても看護実践をカタチにして発表していくことの意義や方法について活発な議論が交わされた。アンケート結果（回答率65.8%）からも、全てのプログラムの内容に対して95%以上の回答者が良いと答えており、感想として、プログラムを通して自身の実践しているケアを伝えられているのか振り返る機会となったこと、実践しているケアを可視化し伝えることの重要性を再認識し、それを様々な方法で発信していくことに対する意欲を得ていたことが記載されており、有意義なセミナーであったことが伺えた。

c．来年度の課題と展望

今年度はZOOMへアクセスできない参加者からの問い合わせが数件発生したこと、オンライン開催による認定看護師間の交流という点において課題が残る。次年度は、セミナーの位置づけに基づき、対象者のニーズを踏まえた内容の充実を図るとともに、セミナーの効果を高めるため対面も視野に入れた方法の検討を行う。

2. 実習指導者研修会

a. 趣旨

実習指導者研修会は、日本赤十字看護大学（広尾キャンパス）と日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、東京かつしか赤十字母子医療センター、横浜市立みなと赤十字病院が共同で企画・運営している。赤十字施設には、看護師養成の長い歴史があり、教育と臨床が共に協力し連携して、後輩を育てる姿勢がある。看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげられるように、実習指導者を育成すること等を目的にした研修会である。赤十字施設以外の看護学実習を受け入れている医療機関等の方も参加可能であり、各講義単位での受講も可能な公開講義を設けている。

b. 活動内容

本研修会は、本センターの継続教育部門委員会に位置付く実習指導者研修会部会を構成する教職員 11 名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員として日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設 1 名、合計 5 名）と協働し、初めて WEB での研修会を開催した。

2022（令和 4）年度は実習指導者研修部会の学内会議を 4 回、学内外の委員による企画会議を 3 回開催し、2 年目となる全面 WEB 開催での研修会の企画・運営を行った。

開催期間は 6 月～1 月とし、開催回数は 4 回、研修会の構成は実習指導に関する理論・演習・リフレクションとした（詳細は別紙参照）。例年、学内演習の見学などのオプションを設けていたが、今年度も感染予防の観点からこれらの機会は見送ることとした。WEB 開催による研修生のモチベーション維持と研修成果の確認を目的とし、リフレクションシートの提出は前年度に引き続き行うこととした。

コロナ禍 3 年目ということもあり、WEB 会議の利用が社会一般に普及しつつあることもあり、研修会開始前に設けた接続テストの参加人数は 6 名と少なく、Zoom に入れないなどのトラブルは昨年度よりも少なかった。

全公開講義は、実習委員会の FD として位置づけ、川上先生の「発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導」については、障がい学生支援委員会の共催 FD とした。

研修会の修了要件は全体の 3/4 の出席を条件であり、研修開始時の研修生は 80 名であり、最終的な修了生は 73 名（赤十字施設 62 名、その他施設 11 名）であった。うち 2 名は、2021 年度に修了できなかった研修生であり、2022（令和 4）年度修了に向けた 2021（令和 3）年度受講科目の遡及適応を検討した特別措置対象の研修生であった。公開講義（FD 含む）の延べ参加者数は 338 名（本学教員 242 名、大学院生 23 名、一般 73 名）であった。研修生へのアンケート結果からも、開催回数（全 4 回　どちらでもない（多い・少ない）82%）、プログラム内容（とてもよかった 52%、よかった 48%）、開催方法（とてもよかった 43%、よかった 40%）について、負担が少なく、有意義な内容であったことが伺えた。

1）2022 年度　実習指導者研修会プログラム

開催月日	時間	プログラムの内容	講師
2022 年 6月 15 日 （水） 受付開始: 8：30	9:00-9:30	開講式／オリエンテーション	
	9:30-10:30	教育課程と実習の位置づけ	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	実習指導概論 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法	佐々木幾美先生 本学　教授
	13:00-14:30	リフレクションの概念	西田朋子先生 本学　准教授

	14:40-16:10	**教育方法　－状況に埋め込まれた学習－** 状況的学習論、正統的周辺参加論	有元典文先生 横浜国立大学 教授
	16:20-16:50	オリエンテーション	
8月17日 （水） 受付開始: 8：30 ガイダンス 8：50	9:00-10:30	実習指導の計画①	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	**教育心理　－学習者の心理－** 人間の発達、学習過程における心理、学生の特性	遠藤公久先生 本学 教授
	13:00-14:30	対人関係論	堀井湖浪先生 本学 准教授
	14:40-16:10	実習指導の計画② Group Work にて、教育カリキュラムと実習の位置づけを検討し、実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
8月～11月	実習指導に関する実習（実習指導案を用いた展開）		
11月28日（月） 受付開始: 8：30 ガイダンス 8：50	9:00-10:30	実習指導のリフレクション Group Work にて、実習指導についての振り返りを共有する	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導 （障がい学生支援委員会　共催 FD）	川上ちひろ先生 岐阜大学　併任講師
	13:00-14:30	看護理論 看護の概念、看護の知と実習指導	川原由佳里先生 本学 教授
	14:40-16:10	**医療・看護の動向と実習**	安部陽子先生 本学　教授
2023年 1月30日 （月） 受付開始: 8：30 ガイダンス 8：50	9:00-10:30	看護倫理　－実習指導を通して伝える看護－ 看護と倫理、実習指導と倫理	吉田みつ子先生 本学 教授
	10:40-2:10	**教育原理　－教育原理と実習指導－** 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観	渋谷真樹先生 本学　教授
	13:00-15:00	実習指導の体験を語り合う：全体のまとめから課題への具体的チャレンジ Group Work にて、立案した実習指導案を用いて振り返りを行い、実際の実習指導で得た学びを深める 実習指導体験の共有、学びや課題の深化、具体的チャレンジに関するディスカッション	
	15:30-16:00	修了式・閉講式	

2) 全 4 回の研修会の概要とアンケート結果

■第 1 回：2022（令和 4）年 6 月 15 日（水）

開校式、オリエン―ションに続き、①教育課程と実習の位置づけ　②実習指導概論　③リフレクションの概念、④教育方法-状況に埋め込まれた学習-についての講義が行われた。

①教育過程と実習の位置づけ：本学が教育理念と教育目標をもとに、講義・演習・実習の有機的な結びつきに取り組んでいること、各学年で体験する実習での反応そして実習指導者と大学教員の連携の重要性について説明した。アンケート結果でもよかった 40%、とてもよかった 53%であった。学年や実習によって学生の特徴や求められることが違うこと、講義、演習、実習の積み上げが大切ということを学んだ、学生だけではなく、指導者も教員もともに成長していくというのはまさにその通りだと

思ったなどの感想があった。

②実習指導概論：「実習指導概論」として“授業としての実習の意味”“看護学実習における指導者の役割”“学生の学びを支援するかかわり”の3点について講義していただいた。実際の実習指導場面でのやり取りやその後の学生の反応・成長について、具体的な事例を通して講義を展開してくださり、「そうそう」と感じ入ることがとても多かった。自分自身の指導スタイルについてリフレクションの機会にもなったので、今後の指導場面で活かしたいと思える内容だった。ディスカッション等はなかったため、研修生の反応はわかりにくい状況だったが、講義後の研修生の感想からはとても良い学びになったことが伝わってきた。新人指導にも活かせる内容であるという多くの感想が寄せられた。アンケート結果でも、とても良かった72%、良かった26%であった。

③リフレクションの概念：リフレクションは、難しいとの固定観念が拭えず、少し苦手意識がある方も多いが、指導者側も試行錯誤しながら実践の中で内省しつつ学んでいきたい。学生に臨床実習で良い経験をさせること、その経験を意味ある経験知に落とし込めるかが本当に重要と感じる。そして、相手(学生)を主体にすることを忘れないように意識したい。指導者側の学んで欲しい事を意図せず優先してしまっていないか、常に自己点検が必要と感じる。相手が腑に落ちる体験を増やし、看護の楽しさを共有していける関わりに努めたいと改めて実感した講義だった。アンケート結果は、とても良かった58%、良かった40%であった。

④教育方法-状況に埋め込まれた学習-：「発達したくなる臨地実習」のコツについてチームで体験し考えようと題して、発達の最近接領域、正統的周辺参加の理論について、例を織り込みわかりやすく講義いただいた。看護職者は普段から患者さんに対応している。その気配りを臨地実習時学生さんに置き換えるだけであることなど、対象者が変化するだけで皆さんできると、お話しされたことが、研修生には気持ちを軽くしてかかわればよいのだと背中を押していただけたのではないかと考えます。WEB研修でのカメラ機能、チャット機能を活用し、研修生が「発言できる勇気」「発言できない心理」のどちらも理解できる体験型講義でした。また、「発達的風土づくりの原則」をチームでワークすることで、個人の考えにプラスになっていたと思います。参加している研修生が皆とてもよい笑顔で、とても楽しく参加でき理解できた様子がうかがえました。アンケート結果もとても良かった 79%、良かった 21%であり、「有元先生のパワフルな授業に自分もできるかも、やってみようという前向きな気持ちになれました」などの感想が書かれていた。

■第2回：2022（令和4）年8月17日（水）

8月17日は、①実習指導の計画①、②教育心理、③対人関係論、④実習指導の計画②と実習指導の具体的な演習も行われた。

①実習指導の計画①：プログラムは①講義と②演習の2部構成であり、①では、稲田千晴先生にご講義を頂いた。実習指導者の役割について学び、教えるということへの概念の転換を図ることができた。また、実習要項の役割を確認した上で実践場面の教材化についての理解を深めた。具体的な事例を通して、言葉や感情に着目して関係性を考えて実習指導案の作成が可能となると考える。②では、グループに分かれて演習を行った。参加者は、事前課題（所属施設の教育機関としての側面）に取り組んできており、Zoom でのワークに積極的に参加してワークを進めることができた。一方で、午前の演習（実習指導の計画①）は、午後の演習（実習指導の計画②）へ繋がるプログラムである中、午前・午後の全体像の中で、午前の演習の到達目標を共有することや時間配分等が困難な様子であった。アンケート結果もとても良かった50%、良かった40%であった。「具体的な実習指導の計画の

立案方法、特にどのような場面を教材として活用するのかが理解でき、今後の指導に活かせると思った」などの感想があった。

②学習心理：学習者である学生の“生涯発達的視点から見た青年期の特徴”と学びの意欲に働きかけるための“学習者の心理過程”の2点についてご講義いただいた。近年の社会背景も踏まえて、身体的・精神的に不安定かつ個人差のある自己意識を持つ傾向にある学習者に対して、個別の特性に合わせてどのように見守り、その学習意欲を支えていくと良いのかを例示とともにご教授くださった。特に、実習指導を行っていて成績評価を気にする学生は少なくないように感じるため、いかに内発的動機づけに関われるかを、学習者の視点で考え続けていく必要を感じた。参加者の反応は、画面offの受講状況で特に質疑もなかったため残念ながら把握はできなかった。時間が限られているため内容の一部は詳細について拝聴できなかった。アンケート結果は、とても良かった47%、良かった33%であった。「青年期の特性を学ぶことで、今後の実習対応に活かせる内容を学ぶことができた」などの感想があった。

③対人関係論：対人関係の基本的な理論から、具体的な事例を通しての学びまで、幅広く講義を展開してくださった。「葛藤の三角形」が印象的であり、「隠された感情」に着目して看護実践や実習指導を進めていく視点は、あらゆる場面で活用できそうだと感じた。また、学生に対しての治療的環境については、次のグループワークでも話題に上り、研修生自身の学びにつながっていることも実感できた。講義後の質疑応答では複数の質問が寄せられており、研修生自身の関心もとても高い内容であったと考える。アンケート結果でもとても良かった51%、よかった47%、であった。「人間関係には感情が絡んでくること、そして隠された感情や不安にも目を向ける必要があることを学ぶことができた」などの感想があった。

④実習指導の計画②：同日に稲田先生から「実習指導計画」についての講義を受け、グループメンバーと自施設の状況など共有を行っているため、話し合いを行う場作りができておりスムーズにグループワークに取りかかれていた。また、遠藤先生からの「教育心理」、堀井先生からの「対人関係論」など講義いただいた内容を参考にしながら、活発に意見交換していた。日案用紙をグループ内で記載し、画面を通して文書を共有できワークしやすかったと思われる。以上から、グループディスカッションのねらいである「実際の実習指導のイメージがわき、指導方法を考えることが出来る」は、達成できたと考える。アンケート結果は、とても良かった59%、よかった27%、どちらでもない1%であった。「フループワークで他の人の意見を交換できて実際に計画立案できたので良かった」など、交流を交えて、今後の実習指導案の作成に向けて、準備できた様子であった。

■第3回：2022（令和4）年11月28日（月）

11月28日は①実習指導のリフレクション、②発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導、③看護理論、④医療・看護の動向と実習の演習と講義の構成であった。

①実習指導のリフレクション：画面越しでの緊張感はあるものの、前回よりは、信頼関係が築けており、安心して自己開示が出来ていたため、話し合いを深める事が出来いていた。各自の指導状況を共有し、指導上の悩みや部署の課題等を共有したり、深めたりと、スムーズに話し合いが進められた。また、講義内容を引用しながら、自身の対応についてメンバー相互に素直に意見交換を行い、今後の指導方法等の修正につながる気づきを得る事が出来ている様子だった。アンケート結果は、とても良かった59%、良かった38%であった。「普段実習指導について振り返る機会がないため、良いきっかになった」「最近では指導側になることが多く、自分の対応について助言をもらえたり、振り返る

機会はありがたかった」などの感想が寄せられた。

②発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導：発達障害の特性について学び、発達障害およびその特性のある学生支援の基本的理解を深めることができた。教育的配慮と合理的配慮（義務）においては、その違いを確認することができた。また、学習者を支援する際には、様々な理論を用いることが必要であり、シームレスな支援のための連携・協働の必要性を理解することできた。対応が難しいと感じる学生の状況や発達障害の特性に見合った関わり方の具体例を示していただいたことで、研修後の実践（指導）に活かすことができると考える。講師の都合で開始時間が数分遅れたが、講義全体への影響はなかった。講義に関して改善点は見次年度は、看護管理者や臨床で教育関わる看護職の聴講参加を促すのも一案と考える。アンケート結果は、とても良かった 43%、良かった 50%であった。「多様性を理解して、障害名で判断せず個性として捉えていけばよいことを学べた」などの感想があった。

③看護理論：理論とは、記述、説明、予測、コントロールを目的とし、現象についての体系的な観点を示し、看護の現象を照らし出す。看護学生が患者とのかかわりや患者に起こっている現象を理論的にとらえ考えることには大きく役立つものである。また、臨床で働く看護師にとっても改めて看護理論について講義を聞く中で看護の役割を、価値を示してもらえるよい機会となると感じた。最近のトピックスとしてリフレクションを通して看護を考える機会は多くなってきたが、看護理論を学ぶこともまた日々の看護実践に意味を与えるよい機会となると感じた。臨床では看護理論に触れる機会がほとんどなくなってきている。実習指導者研修会で実習担当となる看護師にも看護を見つめなおすよい機会となったと考える。アンケート結果は、とても良かった 30%、良かった 67%であった。「実習の場でつまずいた時に理論に戻り、自分の考えをまとめるヒントとして理論を活用していきたいと思った」などの感想があった。

④医療・看護の動向と実習：現在の医療を取り巻く状況は、どのような経緯や法整備によって構築されてきたのかを大変わかりやすくお話くださった。さらに、看護師養成・看護基礎教育の現状と課題に結び付けて説明してくださり、臨床の場で何となく感じていた違和感や疑問点が裏付けられたような気持になった。研修生からの質問へのコメント（最近の学生さんの傾向として、社会化が難しい人がいる、体力もついていない人がいるなど）が、腑に落ちた思いだった。研修生の立場としては、普段あまり深く考えることもなく日々の業務に向き合っていることも、そこに至る経緯を改めて学ぶことで、今後の自身の取り組み方に良い影響を及ぼすものと期待できる。アンケート結果は、とても良かった 32%、良かった 55%であった。「医療体制の変化によって看護師の育成が変化していることを施設側も理解することが、学生が教育しやすい環境を作る上では必要だと感じた」などの感想があった。

■第 4 回：2023（令和 5）年 1 月 31 日（月）

1 月 31 日は、①看護倫理、②教育原理、③実習指導の体験を語り合うの講義、演習を企画し、研修会の最終回として閉講式・修了式を行った。

①看護倫理：看護学生が、どのような倫理問題にどのように出会っているか、看護実践を自分で見つめなおし言葉で語り、話し合いをおこない、自己の看護観を整理していることをお話しいただいた。グループワークでの学生のエピソードや意見交換、また学生が考える「看護とは」をレポートより経験した・認識した・考えた内容を説明いただき、感性豊かに学ばれていることがわかり、看護者として勉強になりました。また、倫理的部分に気づきにくい「everday ethics」を日常の中から気づけて

いけるように、「受容型」モードでの聞き方をできるよう考え行動していきたいと思いました。午後のグループワークでも、先生からの学び得て考えながら学生に接していきたいとの発言が研修生からも聞かれていました。アンケート結果は、とてもよかった 74%、よかった 24%であった。「患者さんの尊厳を守ることについて考えることができ、改めて環境整備から尊厳を守る看護を意識することを継続したいと思った」、「看護倫理の講義や学生さんの学びを聞いて、日々の看護業務のなかで少し忘れかけていた、看護に対する自分自身の思いを再認識することができました」などの感想があった。

②教育原理：教育について、歴史的な背景から現代における課題、そして看護学実習への活用の仕方について、具体的な文献や事例を交えながらご講義いただいた。近代の学問を体系的に学ぶ教育方法では、学習者は「教えられる、学ばされる」ことや人の評価を得るために学ぶことが目的となりがちである。そのため現代においては、学習者が自身の興味や関心を活かして「自ら学んでいく」ために、振り返りを促すことや「学習の仕方を学習」できるよう、教育者として支援していくことの意義を再認識することができた。学習者に期待し尊重することを大切に、そして彼らの成長のために、自分自身を指導・教育の学習者と認識して取り組むことの重要性を感じた。講義後、数名よりチャットにて今後の指導へ対する前向きな感想が投稿された。アンケート結果は、とても良かった 62%、よかった 23%、どちらでもない 3%であった。「教育という概念は、自分が受けてきたものだけだと勘違いしていたことに気づきました」、「教育の歴史、発展について学ぶことができた。自分の実習生との関わりを振り返り、意図的な教育ができるようになりたいと感じました」などの感想があった。

③実習指導の体験を語り合う：グループディスカッションでは、実践した実習指導について、または新人指導について、各自の経験を語り、共有する事ができていた。これまでのワークで、グループメンバーの状況理解も深まっていたために、自由にかつ活発に意見交換を行うことができていた。これからの実習指導についての具体的な行動については、本研修会での講義内容を基に考えることができていた。拡大グループでの発表では、全グループが発表した。パワーポイントの画面を共有して発表するなど、発表方法にも工夫がみられた。研修参加者は、領域を超えて、実習指導について共有することがでた。また、本演習を通して、研修での学びと実践を統合することができており、研修の最後に位置づけられた演習の効果があった。アンケート結果は、とても良かった 67%、良かった 32%、どちらでもない 1%であった。「様々な人の体験談を聞けて、悩みや疑問点が共通するところが多かったと感じた。他者との意見交換が大事だと思った」、「最終的にまとめを行うことで、具体的に自分がこれからどういう実習を行いたいのかを考える機会になった」などの感想があった。

c．来年度の課題と展望

昨年度に比較し、研修生からの通信環境やトラブルが少なかった。各講師の先生方も WEB 環境での講義の経験も重ねられていることから、WEB 開催でも対面同様に双方向性を重視した積極的に参加できる環境を作ってくださり、研修生の満足度も高かったと評価できる。一方で、本年度も研修会当初 80 名のうち、修了生は 73 名であった。ライフイベントや Covid-19 流行に伴う医療提供体制のひっ迫、心身の不調、家族の感染など、コロナ禍による特有の問題により研修生への影響はあったことが推察される。アンケート結果より、WEB 開催の方は感染や移動の心配も少なく快適だったという意見がある一方で、対面でできればより有意義だったという意見も見られ、WEB と対面それぞれのメリットを組み合わせた、開催方法を検討することが課題である。次年度は、感染予防の観点から講義が主となる日は WEB 開催とし、演習やグループワークが主となる場合は、対面開催とするなど、それぞれのメリットを生かした開催方法を検討していきたい。コロナ禍の影響に限らず、受講生のアンケート結果等も参考にし、よりニーズを反映した研修会を目指していく。

D. 実践研究部門

1. 赤十字リサーチ・フェスタ

a. 趣旨

赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指す。

b. 活動内容

2023（令和5）年1月25日（水）17：15～19：15に赤十字リサーチ・フェスタを開催した。今年度も昨年度に引き続きCovid-19の感染拡大を受けて、オンライン（zoom）を用いて実施した。プログラムとしては本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加および日本赤十字看護大学教員による6演題の研究発表とミニレクチャー、研究支援体制についての説明などであった。

今年度のミニレクチャーのテーマは「研究テーマの見つけ方」で、臨床での日々の疑問や課題をどのように研究に発展させるかについて、実際に中心メンバーとして研究を実施した皮膚・排泄ケアCN・慢性疾患看護CNS伊藤麻紀副看護師長、当時病棟管理者として支援した渡邉美香看護部教育企画室長、研究支援の立場から日本赤十字看護大学母性看護学・国際保健助産学専攻の新田真弓の鼎談形式で紹介した。また、研究支援体制の紹介では、医療センター内での研究支援体制に加えて、地域連携・フロンティアセンター実践教育部門が窓口となり、研究における連携（研究支援や共同研究等）を推進することも説明された。

当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学などから、看護職、教員、大学院生など94名であった。

今回もオンライン開催のため、共有画像のトラブルや参加者同士の交流が難しいという点では課題が残ったが、医療センター内・大学内のそれぞれの拠点で対応し、オンライン発表内容について司会を中心に質疑応答を行うという方法で実施したため進行に支障はなかった。一方で、オンライン開催により、勤務後の時間帯、時短勤務や育休中、遠方等の状況にあっても、参加が容易となった。

c. 来年度の課題と展望

次年度に向けては、引き続き日本赤十字社医療センターと日本赤十字看護大学との共催に加え研究支援体制も連携を強化すること、Covid-19の感染拡大の影響が予測される中で、参加者の研究への関心が高まるような内容の充実と参加者間の交流方法を検討する。

E. さいたま地域連携・フロンティア運営委員会

1. 公開講座

a. 趣旨

地域住民とくに本学部の近隣地域の住民を対象として、地域住民の健康に関するニーズに基づいた知識を提供し、地域の健康づくりに寄与することを目的として開催している。

b. 活動内容

2021（令和 3）年度に実施したさいたま市に関する地域診断の結果を踏まえ、2022（令和４）年度は、さいたま市民を対象に「食と健康—美味しく食べてメタボ予防」をテーマに感染対策を講じ対面にて公開講座を実施した。

日時：10 月 23 日（日）10 時～12 時　場所：本学部別館 CoCoRo ホール

講師は、認定 NPO 法人ヘルスプロモーションセンター理事長・医師佐藤和子氏に依頼した。

参加者は、さいたま市民 18 名（応募者 20 名）、学生ボランティアと教員約 15 名であった。実施後のアンケート結果では、参加者の満足度が非常に高かったことが伺えた。

また、睡眠や食生活を見直したいという自由記述もあり、参加者にとって今回の公開講座が、普段の生活習慣を振り返る機会となっていた。

＜「食と健康-美味しく食べてメタボ予防-」講座の様子＞

＜学生が事前に実際に食品を購入して調理＞

c. 来年度の課題と展望

参加の申し込み方法など今年度の状況を踏まえ次年度計画を策定する予定である。

2. 大学コンソーシアムさいたま

a. 趣旨

「大学コンソーシアムさいたま」は、さいたま市内の大学相互の自主性を尊重しつつ、大学が有する知的資源を活用した活動を行うとともに、大学相互の連携及び交流と活力ある地域社会の形成及び発展に寄与することを目的として創設されたものである。さいたま看護学部では「大学コンソーシアムさいたま」に2020（令和2）年9月に加盟して、リレー講座活動に参加し共通テーマに沿った公開講座を実施している。

b. 活動内容

2022（令和4）年度も、「大学コンソーシアムさいたま」の活動の一環としてさいたま市民を対象として加盟大学のリレー講座を実施した。コンソーシアム全体のリレー講座のテーマは、「心と体の健康」と設定され、これを踏まえてさいたま看護学部でのテーマは「笑いと健康」とした。

内容：

第1部　「笑いと健康のメカニズム」さいたま看護学部　教授　成木弘子
　　笑いの科学的根拠の講義および笑いのエクササイズ

第2部　「落語」落語家　三遊亭楽生師匠

対面での開催であったがさいたま市在住・在勤者など申込者59名（参加者54名）であり、参加者のアンケートでは「企画の満足度：大変満足75%、まあまま満足15%、合計90%」、自由記載では「とても楽しく勉強できました。」「顔のエクササイズも楽しかった。笑いの大切さ再認識しました。」「落語も楽しかった」など満足度は非常に高く好評であった。

c. 来年度の課題と展望

次年度も継続して当大学コンソーシアムには、リレー講座への参加を継続として申し込みを実施した。

3. UR 都市機構との連携

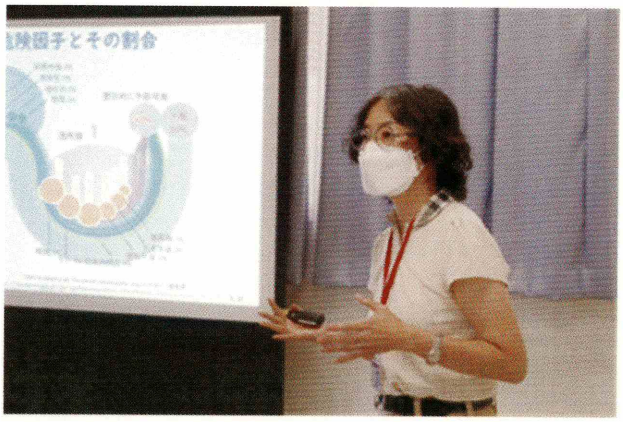
a. 趣旨

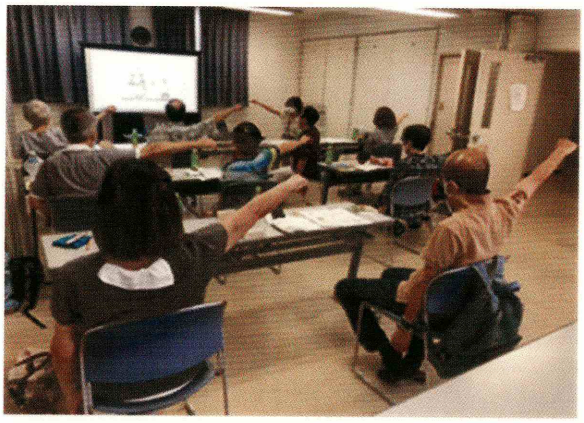
UR 都市再生機構は、居住者が安心して暮らせるまちづくりを目指して健康づくりにも力を入れており、本学では令和３年度から UR の団地における健康づくりを連携して取り組んでいる。

b. 活動内容

2021（令和 3）年度は UR との意見交換を定期的に実施し本学部と UR 都市機構との連携イベント「今から始める物忘れ予防講座」をコンフォール南浦和団地の住民対象に、8 月 10 日（水）10 時～12 時に同団地内集会室において開催した。参加者数は 16 人であった。講座の内容は、本学部の松本佐知子講師によるミニ講座「今から始める物忘れ予防～健康寿命を延ばそう～」であり、参加者から非常に好評を得た。同活動については、UR のホームページに活動の様子が掲載されており、別途実施された成木教授のインタビューも掲載された。この連携イベントは大変好評だったために３月６日に「自宅でいつまでも自分らしく暮らす知恵（本学部松本佐和子講師）による講和および当委員会学生部会の学生とのレクレーションを実施した。参加者団地の住人７名、教員４名、地域連携・フロンティア委員会学生部会メンバー10 名、UR 職員４名であった。終了後のアンケートの結果は概ね好評であり、参加者同士がつながりを作るきっかけにもなっていた。この活動は今後も継続的に開催される予定である。

また、UR 本社および埼玉県支部から本学部と中長期的な連携について申し出があり、11 月 30 日に意交換の場を持ち、UR からは本社ウェルフェア総合戦略部長ほか４ 名、当学部からは学部長ほか 3 名が参加し意見交換を実施した。





c. 来年度の課題と展望

次年度も継続して UR と連携し健康教育などの実施を通して、地域の健康づくりに貢献する予定である。

4. 埼玉県内における２つの赤十字病院の看護師への研究指導

a. 趣旨

さいたま赤十字病院と深谷赤十字病院からの看護師へ研究指導の要請を受け、2021（令和 3）年度から教員 5 名が定期的に研究指導を実施している。

b. 活動内容

2022（令和 4）年度さいたま赤十字病院へ研究指導実績は、指導教員体制 3 名、研究指導本数 21 本(ベーシック 18 本、アドバンス 3 本)、研究指導 5 回、講義回数 2 回、院内発表 1 回であった。その他、他大学からの講師依頼については教員指導体制 1 名、講義 5 回、研修 8 回、研究指導 7 回、院内発表 1 回を実施した。深谷赤十字病院への研究指導実績は、指導教員体制 3 名、研究指導本数 12 本、研究指導 10 回、講義回数 3 回、院内発表 1 回であった。

c. 来年度の課題と展望

指導の要請は継続しており、次年度このような指導を継続する予定である。

5. さいたま市保健所へのCOVID-19対策支援活動

a. 趣旨

本学では、COVID-19を「災害」として位置づけ、2020（令和2）年から学内に災害対策本部を設置して支援体制を整備し、支援にあたっての大学方針も明確にした上で取り組んだ。

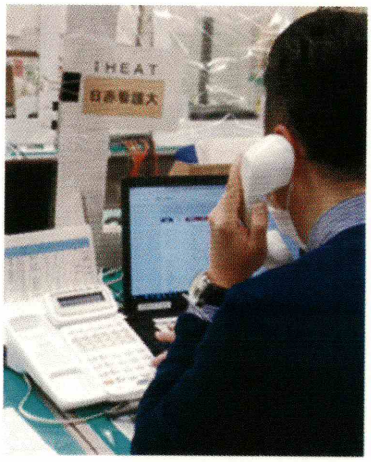
b. 活動内容

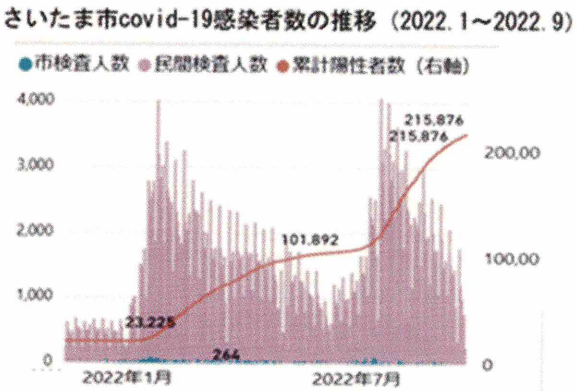
2020（令和2）年4月に開設したさいたま看護学部では、2021（令和3）年8月の第5波感染拡大の時に、埼玉県及びさいたま市からの協力要請を受け、9月8日～30日までの休日を含む18日間にわたり、延べ33人の教員をさいたま市保健所に派遣し、合計1,057件の在宅療養者等への電話での助言や指導、相談に対応した。

また、2022（令和4）年1月の第6波に際しても、協力要請を受け、学部看護教員の7割にあたる21名（土日を含、延72名）を2月10日から3月末まで交代で派遣し、現場の関係者と協力しながら、在宅療養者等への電話対応を行った。支援に赴く教員の選定は、本人からの希望をもとに学内で調整の上、決定している。

保健所への派遣に当たっては、学内での連携体制やフォロー体制の取り決めを行う他、さいたま市とも文書を交わして、役割分担等を明確にした。

これらの連携体制を踏まえて2022（令和4）年度は、感染の第7波の中の8月18日（木）～9月14日（水）に派遣教員を11名（延25名）、13日間に渡って派遣し、架電・受電（院調整中療養者への健康観察、体調不良者の健康観察療養解除ステータス変更、外線対応など）など488件の対応を行った。また、12月には第8波を見据えて早期から派遣の打診があり、学内の業務との調整を実施し3月からの派遣を検討した。





c. 来年度の課題と展望

新型コロナ感染症は、2023（令和5）年5月に感染症法5類に変更するが、感染拡大状況に応じて臨機応変に支援体制を検討していく。

6. 学内での活動の推進

a. 趣旨

さいたま看護学部は、新設されて 3 年目であり、大学外の地域や組織との連携づくりのために学内の連携体制づくりが重要であると考えて様々な取り組みをしている。

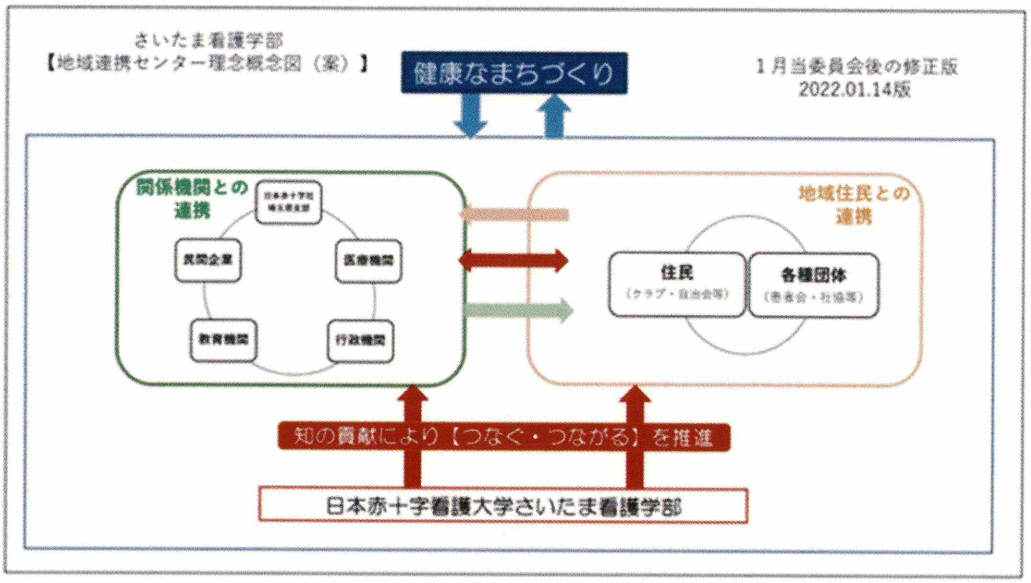
b. 活動内容

(1)2021（令和 3）年度から「さいたま看護学部人材データーベース」を作成するため、学内の教員に対して専門領域や得意な技能などの登録を呼びかけ、それを基に 2022（令和 4）年度から「先生マルシェ（仮称)」として学部内に学内の人材を外部に発信する取り組みに着手し次年度稼働を目指している。

(2)学部内の教職員のコミュニティ・ケアに関する認識を深めるために FD・SD 委員会と連携してコミュニティ・ケアに関する学内勉強会を開催した。令和 2 年度は「コミュニティ・ケアとは（本学部成木教授講義)」、2021（令和 3）年度は「Healthy City から Compassionate Community へ―コミュニティ・ケアの新たな取り組み（本学部鷹田講師)」、2022（令和 4）年度は地域住民を対象として実施した公開講座を学内でオンデマンド配信をした。

(3)外部への本学部の地域連携化活動を発信するために 2022（令和 4）年度から「Twitter」のアカウントを獲得し、地域連携に関する活動を実施した場合には twitter を使い速やかに情報を発信できるような体制を整え実施している。

(4)学部として地域連携に取り組むためには学生の主体的な参加も必要であると考え、令和 4 年度に「さいたま看護学部地域連携フロンティア運営委員会」の学生部会を立ち上げ活動を開始している。2022（令和 4）年度は延べ 20 名の学生が参加し、公開講座の運営の支援、UR とのイベントの運営への参加を実施した。今後はさらに主体的な活動を実施する希望がだされている。



c. 来年度の課題と展望

学内での安定した連携体制を強化するために、現在の活動を継続する。

2022（令和 4）年度　日本赤十字看護大学　地域連携・フロンティアセンター実績報告
作成年月　2023（令和 5）年 10 月
発行　日本赤十字看護大学　地域連携・フロンティアセンター
編集　フロンティアセンター　広報・事務部門
〒150-0012　東京都渋谷区広尾　4-1-3
日本赤十字看護大学
電話：03-3409-0924
FAX：03-3409-0589